



Special Interview

# The Nobel Prize ノーベル物理学賞受賞 天野 浩教授

HIROSHI  
AMANO

2014年10月、「ノーベル物理学賞」を受賞した日本人博士3名のうちの一人、天野浩教授は浜松市出身。「青色LED」という世界的発明を成し遂げた天野教授の、ものづくり精神に迫る。

## 秘訣は「没頭して楽しむこと」 平和で発展的な社会をつくりたい

——ノーベル物理学賞受賞おめでとうございませう。まずは、受賞された感想をお願いします。

大変驚いております。今回三人が受賞しましたが、赤崎先生は毎年、ノーベル賞候補者としてテレビ局や新聞社の方々が押し掛けていたので、いつかは受賞されるだろうなと思っておりました。また中村先生も、学会でご活躍を拝見していましたので、今回の受賞は当然の事だと思えます。そのお二人に私を入れていただけるとは、これまで夢にも思わなかったです。

——ご自身の事でお答えにいかかもしれません。が、浜松からノーベル賞受賞者が出たということについて、どう思われますか。

故郷の方々に喜んでいただけるとしたら、これほどうれしいことはありません。もともと浜松はものづくりの伝統があり、「やらまいか」という精神的な風土もあります。大きな課題に挑戦する気持ちは、浜松で育ったからこそ、かもしれない。物理学とは若干イメージが異なります。

——私が研究を続けてきて今回の受賞につながったことにも、影響があるように思います。

——浜松で過ごした頃の印象的な思い出はありますか。

一番の思い出は、5月の浜松まつりでの風揚げと屋台引き回しですね。子供会で友達と一緒に遊んだり、スポーツをしたことは、今でも大変良き思い出です。

——ご自身の将来を決めたのは、いつ頃の事でしょうか。

研究者になろうと思ったことは現在まで一度もありません。成り行きのまま生きてきたらこうなった、という感じです。きっかけがあるとすれば、赤崎先生から勧められて博士課程に進学を決めたときです。

——在学中に偉大な発明をされるわけですが、どのような学校生活でしたか。

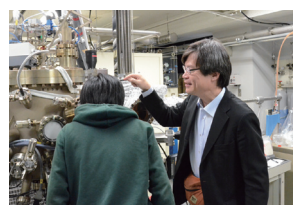
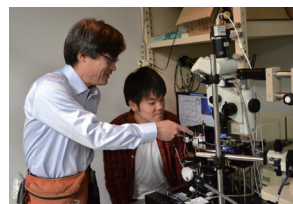
実験してもバツとした結果が全く出ず、3年間どうして暮らそうかと暗澹たる気持ちの日々が続き、一人寂しく実験室にこもって実験を行っていました。今回受賞理由のひとつになった低温パツファ層は、そのような状況で生まれました。

——青色LEDの発明は文字通り、人類の未来を明るくする発明だったと思います。実際に開発に成功された89年には、どのような未来を想像していましたか。

テレビは薄く小さくできそうだ、というイメージはありましたが、そのときは携帯電話やスマートフォン普及までは考えが至らず、ましてや照明に使われるようになるとは思っていませんでした。

——研究を成し遂げるまでには相当な苦勞があったと思えます。最後まで諦めず、モチベーションを維持できた秘訣などがあつたら教えてください。

苦勞と感じたことは一度もありません。秘訣があるとすれば、私が教えてほしいくらいです。



が、もし自分の経験と照らし合わせるのであれば、没頭して楽しむことですかね。

——今後の目標は何でしょうか。

やはりエネルギー問題が人類の最大の課題だと思っております。国と国との争いもエネルギー問題がきっかけになっていることが多いと感じます。人々の生活を支えることはもちろんですが、持続可能な平和で発展的な社会を作ることが、研究者としての目標です。

——最後に、研究者を含めた若い世代にメッセージをお願いします。

私は決して突出した才能があるわけではなく、ごくごく平均的な日本人です。その平均的な日本人が、学生時代にやっていたことが認められたというのは意味のあることかもしれない、と思うようになりました。大学で若い人々をみていると、いろいろな分野で私より優れた才能を持っている人がたくさんいることに気が付きます。いま取り組んでいることが世の役に立つということが分かっているのであれば、これからは是非、最後まで全力で取り組んでください。そうでなくても、これからの人生でいつか自分の道を見つけることができます。ですから、焦らず、腐らず、今やるべきことを一生懸命取り組みましょう。

### Profile

1960年生まれ。浜松市出身。工学博士。専門は半導体工学。静岡県立浜松西高等学校卒業後、名古屋大学大学院工学研究科博士課程修了。同大学工学部助手、名城大学理工学部講師を経て、同大学理工学部教授に就任。2010年からは名古屋大学大学院工学研究科教授を務める。2014年、世界初の青色発光ダイオード(青色LED)の開発に成功した業績が認められ、赤崎勇氏・中村修二氏と共に、ノーベル物理学賞を受賞。